

竹の家の人々



木村梢

竹の家いへの人々

一九八四年二月十五日 初版第一刷

著者 木村 梢

発行者 石原捷彦

発行所 株式会社リビングマガジン

〒160 東京都新宿区西新宿2-7-1

新宿第一生命ビル10階

電話 03(343)2000

定価 一二〇〇円

印刷・製本 大日本印刷株式会社

乱丁、落丁はお取り替えます

©Kozue Kimura 1984 Printed in Japan.

ISBN4-947609-10-9 C0095 ¥1200E

日本音楽著作権協会(出)許諾第8364016-301号

竹の家の人々

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

竹の家の人々
目次

竹の庭	138
止め女	120
長屋門	104
雪の朝	90
銀ブラ	74
天神様	60
紙芝居	42
父の涙	28
母の恋	8

女学校

154

散紅葉

170

黒い影

184

美術部

198

竹の花

212

竹の音

224

資料（邦枝完二の著作一覧）

梢、大好き 瀬戸内寂聴

あとがき

251 248 242

ブックデザイン ● 松永 真

見返し切り絵 ● 邦枝ひさ

竹の家いえの人々

母の恋

梢と柳

梢、という名は父が付けた。

梢にしようか、柳にしようか、父は迷いに迷って、麴町区役所の窓口を前にしてもまだ決めかねていた。

ええい、やっぱり梢にしよう。

用紙に書きこんでほっとしたのであろう。父は頬に微笑を浮かべると友人を振り返った。のぞきこんだ彼は、いい名前だ、と言った。

大正十五年十一月六日のことである。

若き日の文学仲間であつたある友人が、戦後間もない頃に、疎開したまま住み着いた藤沢市鵜沼の家に来て、懐かし気に語ってくれた話である。

「だから僕は、歴史的瞬間の証人だよ」

その人は楽し気に笑った。

その頃の私は、お芋と南瓜かぼちゃぶとりで相当ふくらんでいたの、柳さんと呼ばれないでよかった、と思った。

古き友人と父は、私の生まれた当時住んでいた、大久保百人町での思い出話に余念がなかった。

大正の末から昭和四年頃までのことである。

私の、生まれて最初の記憶も大久保から始まっている。

掌てのひらからころろと転がった毬まりを追いかけて行くと、山吹の根元で止まった。真っ黄色の花を咲かせた枝が手を伸ばす私に覆いかぶさってきて、のぞきこんだ根元が暗かった。この初印象は鮮烈で、今でも私の庭には黄色い山吹が絶えることなく、年ごとに咲き続けて、幼い日と思い出させてくれる。

その頃の新しい貸家の特徴だったのか、一部屋は白壁の洋館風であった。

陽当たりのよい真っ白い部屋には、打ちなおしの済んだ布団綿が積まれてあり、母は手拭いを姉さんあねかぶりして襷たすきをかけていた。桐の簞笥たんすが一つ。その上に赤ん坊ほども大

きさのあるセルロイドのキューピー人形。

母は鼻血を出してしゃがみこんだ。布団綿を千切って鼻に当てた。そのまま積み上げた布団綿に、音もなくゆつくりと背をもたれさせながら私の方を見た。大丈夫よ、という表情であつた。

固まつたように動かないで立ちすくんでいる私と、その時の母を、カメラがロングで捉えているように、色付きの映像で私ははつきり記憶している。

後年母に話したら、母はびつくりして

「二歳か三歳よ、あなたは。よくまあ覚えていましたねえ」

と、言つて、記憶に少しの違いもないことを改めて聞かされた。

幼い頃から病身だつた私は、もう大久保時代に大腸カタルで入院をした。歩いて行けるくらいの病院であつたらしい。祖母と二人家に残つた父は、心配で心配で仕事も手につかず、かといつて病院へは恐ろしくて行けず、病院の屋根が唯一見える、トイレの窓を開けては幼い子に思いを馳せていたそうだが、ある日のこと、父はその小さな窓から首を伸ばすと、突然叫んだ。

「梢、早く帰つてこいよォー」

もちろん病院の部屋まで聞こえるはずはなかった。耳の遠い祖母にも聞こえなかっただろう。帰宅した母は隣家の奥さんから知らされた。

この話は大人になっても、入院とか、トイレの窓の話題になるとよく持ち出されて笑ったものであるが、子煩悩で寂しがりやの父を思うと、笑うどころか、鼻の奥がじーんとしてくる話である。

近くの家の物干し台でドイツの誇る飛行船、ツェッペリンを見たこと、父に連れられて大久保駅まで電車を見に行ったこと、戸山ヶ原が広くて広くて、向こうの方まで空があつたこと、等々、大久保での思い出は数こそ少ないが、よく覚えていて、そのどれもが私にとってあつたかい思い出であり貴重な財産となつたのである。

麴町に生まれ、麴町に育つた父にとって、大久保住まいはあくまでも、仮の住居、であつた。

小町娘

大正十年、父と母は結婚をした。関東大震災の二年前である。

邦枝完二、二十九歳。

小久保ひさ、十八歳。

誰からも祝福されない結婚であつた。

母ひさの兄、小久保輝三しょうぞうは、田谷力三のいた三越少年音楽隊の一員であつたこともあり、伊太利オペラに造詣深く自らもバイオリンを弾くし、絵もうまくモダンな文学青年でもあつた。この輝三伯父と父が友人であつたことから、母との出会いがあつて結ばれたのである。

母方の家はこぞつて反対をした。輝三伯父もその一人であつた。

母は早く父を亡くし、母娘して姉夫婦と一緒に日本橋蛸殻町かきがらに住んでいたが、この姉と折り合いが悪く、悶々もんもんと日を過ごしていた時であつた。

評判の美しい小町娘に父が一目ぼれをしたのか、天の成せる美貌と、芥川竜之介をして言わしめた美青年に母の胸が燃えたのか。

二人を祝福してくれたわずか何人かの友人の一人、村松梢風（注・村松友視氏の祖父）によると、大恋愛であつたそうである。

ある晩、姉たちの目を盗んで、母は二階から屋根伝いに家を出た。もちろん父が手を貸したことは当然である。



結婚する前の母。15～16歳の頃。写真の裏書きには小久保久子とある。

母にそんな勇氣があつたとは信じられない行為であるが、母にとって最初で最後、生涯のたった一度、恋に燃え、恋に生きた日であつたのだらう。

他人に足はおろか腕さえ見せない着もの生活の娘が、廊下から庭へ飛び降りることさえできなかった母が、一体、どうやって階下まで降りることができたのか。

ふだん着の着替えとじゅばん、肌着、それだけの風呂敷包みしか持ち出せなかつた。

母方では烈火のごとく怒り狂つて、未成年をかどわかしたと、父を警察に訴える騒ぎまで起こしたが、良き友人たちの計らいで事なきに至つた。

しかし、それだけで済まないことがあつた。

父方では耳の遠い養母きん幾運が、嫁として邦枝家へ入ることを頑として拒んだのである。十八歳の世間知らずの娘は、涙にくれながら三日間、邦枝家の台所の板敷にしっかりと座り続けたのであつた。

父は一度結婚に失敗をした前歴があつた。

最初の結婚は二十三歳で時事新報の記者をしていた頃である。当時は私の祖父に当たる、孝之輔も健在で、牛込舟河原町に町工場のようなものを持っていた。宮中に納める

馬車の製造である。赤い漆を塗る仕上げを主にそこでやっていたようである。仕事場に続く家に両親が住んでいたのも、その二階に父は部屋を持ち時事新報に通っていた。

夏目漱石の朝日新聞小説、『明暗』の挿絵のモデルになったのがきっかけで、橋口五葉の青山のアトリエに通っていた大場八重子を知ったのは、記者として五葉のアトリエに取材に行ったのが始まりであった。下谷根岸に住む彼女を毎日送ることが日課となり、二人は愛し合うようになる。快活で屈託のない彼女はチャームینگな可愛い十六歳の少女であった。

二人はおいしいものを食べ歩きながら、逢いびきを重ねた。家が貧しくおいしいものを食べる機会の少なかった八重子にとって、目のくらむような日々であった。浅草の中清の天ぷら、神田の藪そば、どここの何々と楽しく食べ歩いたが、吉原大門寺門にある豆大福が好きで、お酒を飲まない父の最も好んで食べたものであった。

周囲の勧めもあって二人は結婚することとなった。九段、富士見町の待合で、祖父の友人、前田徳次郎さんの家「松月」を借りての結婚式であった。

菊池寛、久米正雄、岡本一平、久保田万太郎、松本泰、という友人たちがこぞって列席して祝ってくれた。恐らく父の生涯で最高に輝ける日であったと思う。